■研究十二月往来〈98〉■

「定家」覚書

―禅竹の式子読み―

松岡心平

式子内親王の歌を読んでいると、彼女がいかに「閉じる」イメージにこだわっているか、ということに否応なく気づかされる。

たたきつる水鶏の音も深にけり月のみ閉づる苔のとぼそに　（『家集』二七）

山深くやがて閉ぢにし松の戸にただ有明の月やもりけん　（九二）

雪閉ぢて声ををさめし奥山の松もしらべて春を告ぐなり　（一〇三）

五月雨の雲は一つに閉ぢ果ててぬき乱れたる軒の玉水　（二二八）

今は我松の柱の杉の庵に閉づべきものを苔深き袖　（二八七）

吹むすぶ滝は氷に閉ぢ果てて松にぞ風の声はをしまぬ　（『新勅撰集』三三〇）

「閉じる」という言葉そのものが使われている例を挙げてみた。うち三首には、「雪」「雲」「氷」が「閉じる」様が歌われ、残りの三首ではすべて閉ざされた住居が歌われている。

「閉ざされた住居」のイメージは次の三首からも容易にうかがえる。

住みなれて誰ふりぬらん埋もるる柴の垣根の雪の庵に　（六九）

葎さす宿にも秋のたづねきて月に誘ふは今年のみかは　（一四七）

逢はじとて葎の宿をさしてしをいかでか老の身を尋ぬらん　（一九三）

式子は、自分の住居を「巌の中」にたとえることもある。

憂きことは巌の中にも聞ゆなりいかなる道もありがたの世や　（一九五）

「巌の中」のような世間との交わりを断った住居にも、世間の嫌な情報は聞えてきてしまう。逃げ場のない彼女は「いかなる道もありがたの（容易でない）世や」と嘆く。

夕霧も心の底にむせびつつ我が身ひとつの秋ぞふけゆく　（四六）

をしこめて秋の哀にしづむかな麓の里の夕霧の底　（四八）

このような「夕霧」のたれこめるイメージも何かに押し込められ、閉じ込められる感覚の表明だろう。

「夕霧の底」を見つめる感性は、

淋しさは宿のならひを木葉しく霜の上にも詠めつるかな　（五九）

桐の葉も踏みわけ難くなりにけり必ず人を待つとなけれど　（二五五）

といった彼女の名歌にも通じよう。式子は閑居のさびしさを、木の葉散り敷く地表の視点から繊細に歌うのである。

落葉の下には「きりぎりす」もいる。

吹とむる落葉が下のきりぎりすここばかりにや秋はほのめく　（一五六）

また庭や小野の浅茅の下には「松虫」や「鶉」もいる。

跡もなき庭の浅茅に結ぼほれ露の底なる松虫の声　（二四〇）

打払ひ小野の浅茅に刈る草のしげみが下に鶉立つなり　（二九五）

これらの虫や鳥の落葉や草に閉ざされつつ生きる姿に、式子内親王は自らの影を重ねて見ている。

山深み春とも知らぬ松の戸に絶え絶えかかる雪の玉水　（二〇二）

この玲瓏とした早春の調べの底にも、じつはもう一つの人生の脈絡があった。「松の戸」

（九二番歌にも見える）は『白氏文集』「陵園妾」に基づく表現だが、陵園妾とは讒言により御陵の番人として幽閉された官女であって、式子は自分を幽居の官女によそえているのである（久保田淳氏「式子内親王」『中世文学の世界』）。

幽居とは、斎院や退下後の実生活の反映というより、むしろ彼女の生のスタイル、もっといえばその意識構造の比喩なのであり、こうした「幽居」の中で、現実的な恋そのものではなく、忍ぶ恋の緊張の弛緩の方をいとって命などなくなってもいいと思う。

玉の緒よ絶えなば絶えね永へば忍ぶることの弱りもぞする

（『新古今集』一〇三四）

の、激しい調べも生まれ出るのである。

忘れてはうち歎かるる夕かな我のみ知りて過ぐる月日を　（三一九）

もまた、「我のみ知」っていて、現実の他者は存在しない式子の恋の閉鎖性を物語る歌だろう。

さらに式子は、現実の回路を自ら進んで絶ち、閉じ籠るあるいは閉じ込められることを望んでいるかのような歌さえつくる。

秋こそあれ人は尋ねぬ松の戸を幾重も閉ぢよ蔦のもみぢ葉

（『新勅撰集』三四五）

馬場あき子氏も指摘しているが（『式子内親王』）、この歌と能「定家」の定家葛に身を閉じられる式子像の距離は近い。

式子に、

君ゆゑや始めも果ても限りなき憂き世をめぐる身ともなりなん　（三六七）

という、輪廻転生の間の永劫の恋の苦しみを予感する歌があることも考えると、禪竹は、式子の歌の世界にひたる中から、葛のからみつく墓石に閉じ込められ、出口のない永遠の恋の業に苦しむ女のイメージを取り出してきた、と思わざるをえない。

「秋こそあれ」の歌に見られるのは、単なる籠りの意識ではない。そこには、閉じ込められることにマゾヒスティックな喜びさえ感じる倒錯のかすかな響きがある。それは、禪竹の「定家」にあって、定家葛が愛の喜びと苦しみの両義性の象徴であることに通じ、キリで式子が再び葛にからみつかれ埋もれてゆくシーンへとつながるだろう。

さらに、定家の執心やその具象化としての定家葛を、式子の内向する恋の妄想の分泌物と考えれば、クセの主格が式子か定家かはっきりしないという従来から指摘される問題点も解消しよう。クセは、逆に、式子の精神の内部分裂を言表化した高度な文体と積極的に評価されるのである。

「夢かとよ闇の現（うつつ）の宇津の山月にもたどる蔦の下道」という禪竹の劇中詠の傑作もまた、式子の「閉じ込められた底」の詠歌群と響き合う式子的世界の見事な領略であった。

（東京大学講師）